

生き残り

村上瑪論

春なのに初夏を思わせる宵だった。

ようやく店に灯が入り始めた路地裏には、すっかり店らしい構えのものに混ざり、まだ急拵えのものが雑然と軒を並べていた。

二つの影が、さほど幅のない道に張り出した看板の間を、多少ともおぼつかない足取りで縫ってゆく。片方の影が立ち止まり、暮れなずむ空をゆっくりと仰いだ。頭上にはこれから太っていく月が細々と輝いている。

前年の朝鮮戦争勃発による「特需」景気に、日本の経済もようやく復興の兆しを見せ始め、一時はいくらか少なくなっていた米兵の姿が街中に多くなった。このため、戦争がまだ終わっていないと誰もが実感した。

「何か聞こえなかったか……」

一馬（かずま）は月を見上げ、二三度首をひねった。ひとり言に近かった。訊かれた滝野川は肩をすくめ、「空耳じゃないのか?」と、首を軽く左右に振った。

答える前に一馬は走り出していた。

いつの間にか、足もとには闇が這い上がってきている。ぽかんと口を開け一馬を見送っていた滝野川は、我に返るとあわてて後を追った。灯の入っていない店の角を曲がると、街灯がきらめく大通りにぶつかった。その手前に複数の影があった。

滝野川が近づくと一馬が目の端でそれを捉え、「なにも助太刀を頼もってんじゃないんだ」と笑った。

顕微鏡でしかお目にかかることができない、そんなお友だちと話すのが趣味の、大学に残ったおまえには荷が重いだろ、と続け、ガムを噛んでいる青い眼の男に視線を戻した。

離れたところに、一見清楚ではあるがどこか危うい匂いのある日本人の女。その後ろに黒人の男がいたが表情までは読み取れない。双方とも貸衣裳のような上着を引っかけていた。軍服でなくとも、短く刈り込んだ頭から米兵だということはわかった。立ちすくむ女とどつという関係なのかまでは想像つかない。

「どつするつもりだ、村瀬?」

滝野川は、上着を脱ぎ始めている一馬に訊いた。

「さあ、相手次第だろよ」

「なにがあつた？」

一馬は、この異人さんたちはこの女性と知り合いだそうで、これから飲みに行きたいそうだが、女性の方は知らないので嫌だということだ、と一気にしゃべった。

「なら、おれたちの出る幕じゃない」

「だが乗りかかった船だ」

「そうはいつても、なあ。ここで下手にあちらさんと騒ぎを起こすもんなら、各方面がうるさいぞ」

一馬は返事の代わりに上着を滝野川に投げた。ポマードで固めた髪からバラバラと落ちる髪をつるさそうにかき上げると、両手を軽く握り軀を斜めに開いて腰を沈めた。前に突き出した左手を小刻みに上下させている。

いまの職場に来て上司の実家がある空手の宗家だということを知った。ある朝、職場の近くで飲み明かした一馬は、守衛室の片隅で一眠りするかと門を乗り越えた。そのとき中庭から声がした。不審に思つてのぞいてみると、課長が、拳、甲、肘、腕、そして脚を使い、打つては引く動作を繰り返している。もろ肌脱ぎになつた上半身をつつすらと汗が覆つていた。そこにあるのは短歌が趣味という男の肉体でなかつた。

一馬はしばらく無駄のない筋肉の動きに見とれていた。やがてそれに気づいた課長は、「ずいぶんと早いな、村瀬君」とバツの悪そうな笑顔を浮かべ、まだ汗の残る上体に急いでシャツを羽織つた。

「課長、さっきのは？」

「ああ、あれね。いまは帰ることのない沖縄のわが家に伝わるものだよ」

課長の言動は、すでに短歌だけが趣味の目立たない男のものになっていた。

その日から二人の早朝の練習が始まつた。きれいごとで空手を学びたいといつても、しよせん喧嘩に強くなりたかつたのかもしれない。

レイテ沖海戦の連合艦隊壊滅から硫黄島玉砕により敗色が濃くなつた昭和二十年。ある獣医学校に通つていた一馬は海軍飛行予科練習生に志願した。机を並べる滝野川は大学に残つた。彼の方が成績優秀だということもあるが、いくらか冷静だったのかもしれない。母親は涙を流しつつ、一馬さんはなぜ滝野川さんのようにできないのですか、とかき口説いたが、いざ出征となると家にあつたナマクラを軍刀に仕立ててくれた。

中尉の階級章をつけ土浦の霞ヶ浦航空隊では毎日空ばかり眺めていた。記録には残らない第五航空艦隊司令長官宇垣纏中将機以下十七機が飛び立つと日本は敗けていた。

一馬は東京に戻った。どこも瓦礫の山だった。張りつめていた糸が弛んだようだった。何かに苛立っていた。進駐軍と称していた米兵と喧嘩に明け暮れる日が続いた。だが体格の差からか、道端に沈むのはいつも一馬だった。赤チンの瓶を片手に、鏡をのぞき込んでいる姿を見て、まだ戦争は終わっていないんですか、というのが母親の口癖だった。

口を糊するために運送会社の整備工場で働いていたことがある。そこにジープに乗った米兵がよく立ち寄った。彼らは愛想よく話しかけてきたが、車の整備をしてほしいのか、ガソリンの横流しを望んでいるのか、見当がつかなかった。喧嘩もまず口からだということとで、一馬は英語を教える学校を物色した。そんな折、「これからは英語ぐらい話せない」と誰も雇ってくれない」という宣伝文句に誘われ、神田のある英会話学校の夜間部に遊び半分で通い始めた。

その後、先輩の口利きで似合わないと思ったが、東京都の衛生局に潜り込んだ。勤務地を転々としながらも暇があれば会話学校に通った。腕っ節以外で滝野川に誇れるものがひとつできた。しかし江戸っ子が自慢の滝野川は「村瀬のやってるのは米語だよ。英語をやんなくてどつする」が口癖だった。

研究室に残った滝野川にはすでに博士号の影がちらついていた。衛生研究所の獣医衛生課・獣疫検査室で働く一馬といえば、顎(あご)であれこれとこき使われる下っ端だった。だが二人は、どちらからともなく連絡してきては安酒をあおった。

きょうも滝野川から連絡があった。鞋(わらじ)のように大きい、紙のように薄いトンカツを肴に腹(はら)をいらいをい、一件目に向かう途中だった。

(いけるかもしれない……)

一馬は口を動かしている青い眼の男の前に思った。日本人にしては背丈のある自分より二回りも大きい相手である。拳闘のファイティングポーズをとってはいるが、どこか動作が鈍く脇の甘さがやけに目立った。

課長との約束である「私的闘争に琉球武术を使わないこと」が頭を横切ったが、このことは義憤だと打ち消していた。

「なあ、話し合いでこの場をおさめることはできないのか」

滝野川は一馬の上着を小脇に抱えている。

「ばかやるつ。おれにそんな手の込んだ会話ができるかよ」

「ふうん。おまえの学校通いもそんなもんか」

一馬は、たしかにな、おれの会話力なんてそんなものか、と苦笑した。

米兵はそれを嘲笑ととったのか、卑猥な言葉を発しながら殴りかかってきた。パンチが唸り飛んでくる。以前だったら二三発のうち一発は顔面で受けていた。足技がないのも気が楽だった。たまに正面に伸びてくる拳も手刀で左右に払った。

足先で軽く調子をとり飛び跳ねる動作を繰り返す。息の上がつた上体を持て余した米兵は、両手を広げ咆哮と一緒に突進してきた。組まれては勝ち目はない。軀を入れ替えざまに一回転し、脚を大きく振りかぶると踵（かかと）を相手の後頭部に叩き込んだ。

飛び込んできた勢いも加わり、米兵はずいぶんと前のめりにつっ伏していた。それを確認し、鼻先を手の甲で小さく擦り上げると顔を戻した。

黒人の男がシャッター一枚で真正面に立っている。

両手をだらりと下げ、さきほどの一馬のように足先で調子をとり始めた。背はそう高くない。米国人としてはむしろ低い方だろう。男は白い歯を見せると一馬から目を外し、夜気を切り裂くごとく、いく筋ものパンチを生温かい闇に放った。一通りの動作を終え短い息を吐くと、射るような目つきとともに間合いを詰めてきた。

うるさいほどに左手が伸びてくる。だんだんと拳が大きくなる気になった。払おうにも相手のスピードについていけない。数歩下がった。苦し紛れに繰り出す拳も足蹴りも、こことくかわされてしまう。何度か左右の頬を風が掠ったと思ったら、腹部に鈍痛が走っていた。次の瞬間、顔の正面に黒い拳が浮いていた。

滝野川が何かを叫ぶのと引きかえに意識が遠のいていった。

「……大丈夫か？」

見慣れた顔がのぞき込んでいる。星がきれいだった。軀を起こそうとして胃袋がひっくり返っていることに気づいた。

「どのぐらいのびていた？」

「十分ほどかな」

滝野川は腕時計の文字盤を指先でなぞっている。

「やつらは？」

「おまえをノシたやつが片割れを担いでいつちまった」

「女は？」

「急いでいるとかで礼を残して姿を消した」

「……………」

一馬は立ち上がった。袖口で鼻を拭くと、生乾きの血が白いシャツを染めたのが、夜目にもはっきりわかった。顔面の借り物のような感覚に比べると、腹部は鬱陶(うつとう)しいほどに痛さを引きずっている。だまって歩き出した。

翌朝、一馬の顔を見て課長は「おや、転びましたか？」と笑い、一人の研修生を紹介した。伊藤和恵と名乗るその女性は、顔を腫らした一馬にちよつと面食らつたようだった。これじゃまともな自己紹介でもないな、と一馬は自分の机に戻り資料を整理しだした。

背後に気配を感じ振り返ると、和恵が「課長が村瀬さんの指示を仰ぐようにとのことで」と立っていた。どこかで見たことがある眼に見入った。相手はしつかりその視線を受け止めた。戸惑いを覚えた一馬は、顔の傷を不器用に指で探った。痛みに顔がゆがんだ。

「ほんとに転んだんですか？」

和恵は心配そうに尋ねてくる。そのくせ目はどこか笑っていた。生返事をした一馬は、狂犬病の発生年月日別のファイルに症例報告を仕分けする作業を頼み、自分はトイレに行くふりをして非常階段でたばこに火をつけた。

数日のうちには、指示がなくても和恵はてきばきと作業をこなすようになり、仕事量が減った一馬は、非常階段、ときには守衛室でたばこを吸う機会が増えた。

顔の傷もだいぶ落ち着いたころ、所長室に呼ばれた。仕立物のスーツに小太りの体型がおさまっている。血色がよく、薄くなった頭部には冬でさえ油が浮いていた。

「どうだ、仕事は慣れたかね」

きょとんとしている一馬に、慰労を兼ねて何かごちそうしたくてね、と所長はいった。食い違つてばかりいる会話を二つ三つ残して所長室を後にした。

部屋に帰ると課長が寄ってきて、これでしたか、と親指を立て首を搔(か)く仕草をした。一馬は首を左右に振り、その反対、と答えて頭を抱えた。

「もう一年近く経つというのに仕事に慣れたか、とは。あの所長ならありえるかも。ま、今夜は心置きなく楽しんでください」

夕刻まで抗体検査のレポートに手を入れて時間をつぶした。五時前に所長室に行くと、まだ何本か電話をかけなくてはいけないから、あと三十分待つようにといわれた。

中庭まで来ると朽ちかけたベンチに腰をかけた。火のついていないたばこを口の端にくわえ、灼けた雲の浮かぶ空を見上げた。土浦でこうして空を見ていた頃からずいぶん経つ。そんなことをぼんやり考えていた。そばを和恵がちょこんと頭を下げて通り過ぎた。

呼ばれた声に目を覚ますと、西の空にはまだ残光があった。

所長はまずの行きつけの店で何か食べようといった。店の前で「洋食屋ですか」と聞くと「いやレストランだ」と首を横に振った。料理が運ばれてきて一馬は面食らった。牛肉である。しかも生焼けて血の色があざやかすぎる。

躊躇していると「なんだ、ピフテキは初めてか。これでも火を通させたほつだぞ。食べなさい。元気が出るから」と声を上げて笑い、赤い肉片を口に放り込んだ。さらに、「料理ですがこの葡萄酒も初めてです」というのを遮り、「ワインだ」と訂正した。

おもしろい所で一杯飲もう、と連れていかれたのが「フジヤマ」という店だった。

そう広くない店内を差し障りない音楽が流れ、落とし気味の照明は現実からの逃避を手伝うかのような感じだ。そしてなによりも刺激的だったのが、鼻の奥をくすぐる脂粉の香りである。どこまでも沈みそうになるソファに腰を下ろすと、奥のカウンターには見たこともない洋酒の瓶が並んでいる。

「あら所長、お久しぶり」

店の切り盛りを任されているという和服の女性が、いそがしそうにたばこを吹かす所長にあいさつをした。「いま美樹ちゃん来ますからね。あっ、それともう一人とびきり若い娘がいるわね」と、一馬に笑顔を見せて席を立った。

所長はこの店で自分がいかに顔をしゃべる。一馬は手持ち無沙汰にそれを聞いた。女性二人が来た。美樹という娘は所長の横にぴったりと座った。一馬の斜め前に座ったのは二十歳前後の娘だった。一馬の位置からは美樹の顔はよく見えない。

とりとめのない時間が過ぎ、所長が名残惜しそうに勘定を頼んだ。入口でトイレに行った所長を待っていると、このあいだはありがとう、と背後で声がした。一瞬の間を置き、振り返ると声の主に視線を注いだ。

「とんだ災難だったわね」

さきほどまでの取り澄ました表情とは打って変わっている。何のことだろうか。おもいをめぐらせているところへ所長が戻ってきた。二人は店を出た。

「米兵相手に無茶はしないことね」

美樹の声が背中を押した。一馬は舌打ちを残すとその場を後にした。

数日後、その美樹に呼び出された。

「来てくれないかと思つたわ」

首をすくめる美樹に、なぜだ、と一馬は笑った。

あの夜「フジヤマ」にいた人間が店を出した。そのお祝いに駆けつけるところだった。米兵と裏通りですれ違った。美樹を呼び止めた彼は、「フジヤマ」に以前行ったことがあるという。下士官が遊べる店ではない。たぶん将校のお供をしてだろうが、その白人に対する記憶がほとんどなかった。これから飲みに行こう、いや先を急ぐ、といったいるうちにもみ合いになった。そこに一馬の登場となったわけである。

「それで、こつちが伸びている間にドロンかよ？」

「もちろん心配だったわ。でもあなたの友だちが急いでるならいいというので……」

「ちっ、滝野川のやるっ」

一馬は舌打ちをした。美樹は、仲のいい友だちなんでしょう、と忍び笑いをしている。

「ねえ、お礼と罪滅ぼしに今度夕ごはんご馳走させてくれる？よければお酒でもよ」

「へっ？」

美樹は一馬の視線を軽く受け流すと、腕を後ろで組み鼻歌交じりに歩き出した。数歩進み、「だから、夕食の誘いに乗ってくれるの？」とふり返った。

木々の間を風が吹き抜けた。葉擦れの音が耳に心地よい。髪を押さえ「実はね、わたしって人のものなの」という美樹をちらりと見て、背伸びをしかけた一馬は腕を降ろした。

「つまり？」

「つまり誰かの女ということ。それもあなたの近しい人、職場にいたりしてね」

「……………」

一馬は足もとの小石を大きさに蹴った。

「もう逢ってくれない？」

「ごっかな。つきあいは長いのか？」

ずいぶんとはかなことを訊いたものだ。後悔が押し寄せた。曖昧な表情をしているであろう顔をつるりと撫でてみた。

「ごっかしらね」

美樹はつま先立ちで空を見上げている。どこかに年上の女だという余裕があった。その姿勢のまま、ぼつりぼつりとしゃべりはじめた。

この戦争で先代からの店が灰燼に帰し父を亡くした。後妻との折り合いが悪く、はやばやと家を飛び出し事務職に就いた。あとはおきまりのコースである。いつの間にか「フジヤマ」という店に顔を出すようになり、ある日常連客のテーブルに顔を出した。身の上話をするうち、店の借金を肩代わりするので月に二度ほど逢わないか、という話になった。

数日考えて美樹は首を縦に振っていた。

一馬の視線は、ブラウス越しの下着の肩紐の線に貼りついていて。

「もうひとつ驚くことがあるの」

くるりと回った美樹に、眼をのぞき込まれた一馬はあわてて視線をそらし、どんなことにだよ、と仏頂面で訊き返した。

「それは今度。夕食を一緒にしてくれた時にね」

美樹はふたたび背中を見せた。スカートから交互に現れるふくらはぎが眩しかった。

蝉の音がまるで空を覆（おお）つかのようだ。入道雲が力強く伸び上がっている。象が鼻先を水場に入れては振り上げ、背中にその飛沫を投げかけていた。

「この花子何代目なの」

「うーん、三代目かな」

一馬は肩に提げた水筒をたくり寄せると、象を見たままのどを鳴らして水を飲んだ。額の汗をまくり上げたシャツの袖で拭う。

「んもつ、いいかげんなんだから」

和恵はシオルダーバックから扇子を取り出し、手品師のように打ち広げると静かに首筋に風を送った。そのくせどこにも汗らしきものは浮いていない。

「暑いのかしら？」

「そりゃそうだろう。いくら南国生まれとってたってこの暑さはこたえるぞ」

「飲み過ぎた翌朝もでしょう」

「かもな。だから水筒は手放せない」

一馬は、ベンチの背もたれに寄りかかり胸もとに風を入れた。

午後からは課外研修ということで動物園にきた。課長の、とにかく動物を見てこい、の一言だった。獣疫検査室で狂犬病の検査を担当しているからなのだろうか。昨年の一月から五月まで、二百三十六人が犬に咬まれうち三人の死亡。これにより狂犬病予防週間となった。今年もすでに四月の上旬までに九十一匹が発病、咬まれた者二百十九人、死亡五人となっている。それとこれと何の関係があるのか。この暑さだ。考えないことにした。

出かけるとき同僚に、真つ昼間から逢引か、どこかに消えるなよ、とからかわれた。ばかなことを、と一馬は動物園の門をくぐった。ただ、壊れかけた扇風機の前で、汗だくになっっているよりはましだ。いっしょにいる和恵はやけにはしゃいでいる。

「何が楽しい？」

「好きなの、動物が。それに二日酔いの村瀬さんを見ているとおもしろい」

一馬は、勝手にしゃがれ、といい目をつむり腕を組んだ。全身を風がなで上げた。蝉の音がだんだん遠のいてゆく。象の糞尿の匂いがかすかにした。

「はい。これ、食べる？」

和恵がアイスキャンディーを持って立っでいて、いらなんだったら食べちゃうけど、という言葉に、もらう、と一馬は答えた。灼けたのどにその冷たさがたまらなかつた。

アイスキャンディーと格闘している一馬を横目に、

「最近誰かに逢ったでしょう？」

と和恵はいった。

「誰かって？」

一馬は顔を上げた。

和恵は、さあ誰かしら、と口の端にキャンディーの棒を残した一馬を置いて立ち上がった。洪々とベンチから腰を上げ、「なんだよ、あいつ」とキャンディーの棒をゴミ箱に放り込み、園内案内板の前で「おい、つぎはどれだ？」と、声高にいった。

「なによ恥ずかしい、大きな声で。そうねえ、つぎはトラかしら」

案内板を確認していた一馬の指が止まった。うつむいている和恵の肩が笑っている。

「まったく。去年、タイから来たトラはすぐ死んだじゃないか」

和恵は、そうだった、と舌を出した。

まだ暑い日がつづいたが、季節は確実に秋に向かっている。太陽が西に傾くと風は涼しさを増した。ひと頃に比べると日が暮れるのも早くなり、街角に灯が入るのも駆け足でやって来た。サラリーマンたちは、上着、ネクタイなし開襟シャツの夏スタイルで家路についている。その流れを視界の隅に置きながら、ほんとかよ、と一馬はつぶやいた。

「なにがよ？」

「ほんとに行くの、か」

「いけない？だって誘ったのはそっちでしょう」

たしかに誘ったのはこっちだ。二日酔いのぶり返しなのか、ちょっと飲みたくなつた。じょうだん半分でつい声をかけてしまった。断られることを期待して、この娘が行きそつもない場所を挙げてみた。だが、おもしろそう、と目を輝かしているのには閉口した。

おもむろに「酒は飲んだことあるのか」というと、「ええ、小さい頃から家で適当に」とすましている。「二三日で潰れるカストリ片手に、なんの肉だかわからない煮込みをつつ

いたことは？」といえば「ないけど、やってみたい」ときた。「ま、いい。手頃なところをのぞいてみるか」と、一馬はスタスタと歩き出した。和恵はだまつてついてくる。

喧騒とたばこの煙の中に裸電球が浮いていた。安酒の匂いが充満している。まだ早い時間なのに店はたいそうな混みようだ。奥に申し訳程度の場所を見つけて一馬と和恵は腰を下ろした。周りの視線が二人に注がれる。正確には和恵にである。他に女の客がいないわけではないが、若いということでは彼女しかいない。

「な、来るんじゃないかったらう？」

「ううん、平気。こついつ視線には慣れているから」

和恵は、まともな味などしないビールをグラスに注いだ。その手もとを見て、一馬はおやと思った。どこか手慣れている。どうみても獣疫検査室の研修生ではない。

「一、二、三の肴に箸を走らせ、ビールを空にすると焼酎を頼んだ。追いかけるように、わたしも、それ、と和恵は焼酎を注文した。

「だいじょうぶかよ」

一馬の心配顔をよそに、和恵は、どうかな、とクスクス笑っている。そのわりにはいける口らしく、顔色ひとつ変えることなくコップの中の液体が減っていく。ほどなく三杯目が狭いテーブルの上に置かれた。おっとこれは、といってそれを取り上げ、ほとんど自分のコップに注いだ。

「あ、ずるいー！」

「飲み過ぎは健康のためによくない。はやい話が昼間のおれだ。好物のライスカレーも食べなかったからな」

「まだ二杯目よ。五杯目が空になった人とは違う」

和恵は口を尖らせた。

一馬は鼻先で笑うとコップの縁に唇をあてた。透明な液体をゆっくり口の中に移し替える。眼を閉じた。店内の喧騒は相変わらずだった。下品な哄笑にまぎれて酒器、食器の類の触れ合う音がする。ひとりしてその迷路を彷徨っていた。

ふと眼を開けると和恵の瞳に出くわした。さして興味のない素振りや焼酎を一口含み、肴をつついて顔を上げるとまだ瞳がそこにあった。

「ん、どうした？」

「村瀬さん、動物好きですか？」

（どうかな。どつちかというつと、酒かな。二日酔いでも夕方になると飲みたくなるから。

そう、やっぱり酒だな)

「動物？ああ、もちろん好きだよ」

「じゃあ、わたしのことは？」

一馬は返事の代わりに焼酎を吹いた。

返答に困った。咳き込みながら、すきさ、といい焼酎をあおった。

「うそ」

「ほんとさ。こんな中途半端な男をよく補佐してくれる。きらいなんていおうもんならばチがあたるって」

一馬は苦笑した。

「わかったわ。なら質問をかえる。つきあっている人はいるの？」

「いないな、いまは」

「なら女の人と逢うのはやめて」

「おんな？」

以前職場に連絡してきた女だという。美樹のことだろうか。和恵がなにを知っているのか、ちよつと気味悪かった。刺すような視線を全身に感じながら、一馬はそれ以上話にはのらず生返事を繰り返した。

それからお互いいくつかのコップを並べる羽目になった。

「わたし、こうみえても大人なんだから」

ちよつと飲み過ぎた、もう帰ろう、と立ち上がった背中にそんな言葉が刺さった。一馬は勘定書を握り締めるとだまって出口に向かった。

夜風が火照った顔に気持ちよかった。街灯が道先を案内するように点いている。表通りから裏通りへ入った。やや遅れて和恵がついてきた。

「どうした？」

「いい風！」

銅版に磔刑のキリストが打ち出された看板を掲げた店があった。看板を照らす明かりは点灯しておらず、店内に人の気配はない。和恵は目を閉じてその扉にもたれかけた。一馬は横に並んだ。やがて軀の向きを変えると、正面から面と向かい和恵の顔を挟む形でその両側に手をついた。

「いい風だな」

そつと眼をのぞき込んだ。両手が立ちふさがっているため、彼女は体勢を入れ替えるこ

とができない。街灯が瞳に映ってキラキラと輝いていた。一馬は映り込む光に吸い込まれるように顔を近づけた。和恵は、いや、と身動きのとれない空間の中で顔を背けた。

「なんだ恐いのか」

「そんなことない」

その大きな瞳を見開き、いまにも燃え出しそうな視線を投げてよこした。小さく開いた口がかすか震えている。濡れ色の唇がへんに艶めかしかった。そこから吐かれる息でさえ総天然色ではと錯覚したくらいである。

「さっきの話はうそか。大人だといった話だ」小さく笑つと、手を外し夜空を見上げた。

和恵はかぶりを振った。一馬はポケットに両手を突っ込むと、ふたたび並んで店の扉に背を預けた。遠くで断続的な車のクラクションがした。

「すまない。すこし悪ふざげがすぎた。もういいから行こつ」

一馬は自嘲的な笑いを浮かべ、扉から背を持ち上げた。

首に腕が絡みついてきた。次の瞬間、唇に何かが重なった。それが何であるのかがわかるまで時間はかからなかった。気づくと吸い返していた。相手もそれに強く応えていた。顔を離れたとき和恵の瞳は濡れていた。映り込む灯りは小刻みにざわついていた。

「ちよつと酔ったかな。さ、帰ろつ」

そつと和恵の肩を抱いた。

うしろでかん高い口笛、そしてからかうような声がした。何気なく声のした方に首を回した。一人の男が立っている。街灯と街灯のすき間に位置しているため顔まではわからぬ。ずいぶんとでかい図体だなおもった。だいぶ酔っているとみえ影は間断なく揺れている。ああそつといえはこつちも酔っているんだっけ、とそのまま行きかけた。

また一言あつた。英語だ。和恵の肩から手を外すと、ゆっくり振り返つた。男は街灯の輪の中に一歩進み出た。ちつ、またあいつだ。一馬は舌打ちをした。先日この近くで大立ち回りをやった牛のような米兵である。ボクサーくずれの黒人はいない。

男は、きょうも色男だな、と下卑た笑いを浮かべた。どうせ一戦となるだろう。一馬は水筒の紐を短く持ち、固く手に巻つけた。中で残り少ない水が音を立てている。どっちも勝ち目はないぞといつてみたが、男は白い歯を見せ鼻先で笑っただけであつた。

誰かを呼ぼうとする和恵に、すぐ片がつくさ、といった。そんなことをされては事が面倒になる。一馬は、ちよと酔っているかなと、二、三度首を左右に曲げているうちに、もうパンチが飛んできた。

前腕で受け流すと、裏拳の要領で水筒を相手の左頬に打ち込んだ。浅かったので期待したほど効かないようだ。米兵はすぐに向き直って二発目を寄越す。ちょっとどころではなく、かなり酔っている。流し損なって右肩で受けてしまった。その図体だけあって重いパンチである。よろけたところを組みつかれた。あとは転がりながら一発もらっては一発返すという乱闘となった。

隙を見て馬乗りになると顔面に一発お見舞いした。ついでにあと数発ほどと、拳を振り上げた。その下で男は薄ら笑いを浮かべている。なんだへんな野郎だなと思い、さらに大きく振りかぶろうとした。

そのとき左わき腹に冷たい感触が走った。ふとそのあたりを見た。視界に入ってきたのはコルトの四十五口径軍用拳銃である。高々と上げた手を静かに降ろした。拳銃がぐいぐいとわき腹に押しつけられる。一馬は相手の軀から脚をどけた。男はゆっくり立ち上がった。つられて腰を上げようとする、銃把でたたかに横つ面を殴られた。

口の中が切れた。口の端を袖口で拭っていると、今度はこめかみに銃口がびたりと当てられた。その冷たさが血液に乗って頭に広がっていく。頭髪がざあっと音を立てて浮き上がった。和恵は茫然としている。男が左手で放った重いパンチが腹に二三発くい込んだ。

「殺せよ。引き金にあるその指に力を入れれば済むことじゃないか」

男は冷たい笑いを浮かべている。

「一度は捨てたこの命、べつに惜しいとおもわない。大戦でおまえがどの部隊だったかは知らないが、同朋は星条旗を掲げた軍艦に突っ込んだのさ。順番がきて、飛び立とうとしたら八月十五日になっていた。おれはその生き残りだよ。土の下で眠るおまえの友人たちには気の毒なことをしたがね」

銃把がまた飛んできた。男は、望みどおりにしてやる、といって銃身を一馬の口に押し込むと撃鉄を起こした。

和恵の悲鳴と同時に、どこかで怒声が聞こえた。殴られすぎて視界が狭くなっている。どついう状況にあるのか、もつ確認するゆとりもなかった。ただ口を埋めていた銃身がなくなっただけはわかった。

はるか遠くから、「所属部隊は」「始末書で済むと思っのか」「きょうのところは見逃さう」と、いっような内容の英語が途切れ途切れに聞こえた。

「歩けるか」

声の主は落ち着いた口調だった。

一馬は「たぶん」と答えるとぼんやり顔を上げた。視界の端にその影はいた。礼をいおうと立ち上がりかけてふらついた。

「ほらほら、そこのお嬢さんに肩を貸してもらうことだな」

そついうとポケットから捜し出したマッチでたばこに火をつけた。ひかりの中にかすかに顔が浮かんだ。「あまり無理をするもんじゃない」といふ言葉を置いてその白人は背中を向けた。

鼻の奥に血の匂いがこびりついている。和恵の助けを借りて立ち上がると、ざまあねえな、と口の中にたまった血を吐き出した。

数日後、課長が、村瀬、村瀬と呼んでいるのを守衛室から戻ってきた一馬は廊下で聞いた。返事とともに部屋に入ると、課長は整髪油で汚れた受話器を差し出し、電話口に出るという。

わけがわからずそれを耳に当てた。飛び込んできた言葉は英語である。相手は米国陸軍付属医学総合研究所、ウィルス部長のアンスロー中佐と名乗った。用件は、東京の狂犬病の発生状況について知りたい、とのことだった。

一馬は「自分の語学能力での即答は不可能です。後日、関係資料一式を持ちそちらにうかがいたいとおもいますが」といい、了解を得ると受話器を置いた。

それから資料作りが始まった。獣疫検査室内の狂犬病検査室で、補体結合反応と動物試験を担当する一番の下っ端に、先輩たちも普段と違い協力的だった。ときには和恵に使いをしてもらい滝野川の知恵も拝借した。出来上がった日本語の資料を前に、「生憎と手もとには日本語の資料しかない。でき得るかぎり口頭で説明したい。それでもいいか」と、電話をしてまだGHQの各部署が点在する丸の内を目指した。

一馬は、視線を動かさず姿勢を崩さない門衛の間を抜け、大理石の階段を駆け上がり建物に入った。各部署の名が右手のボードに並んでいる。四 六医学総合研究所と書かれた通称四 六部隊の名はすぐに見つかった。受付でアンスロー中佐の名をあげ来意を告げると、席を外しているのでここでしばらく待てとのことだった。

資料が詰まった紙袋を足許に置いた。スーツ姿の男にに混ざり、いくつかの軍服姿がいそがしそつに行き交っていた。何年前のことだろう。この国の人間たちを相手と殺し合いをしていたのは。あの頃の自分たちはいつたい何だったのか。気が遠くなった。

受付で呼ばれ、二階の部屋を教えられた。木目の美しいドアの前で止まる。深々と息を吸い込みやおらノックした。

「カム・イン！」

マホガニーの扉の向こうで低い声がした。

そつとノブに手をかけた。窓の外を見ていた椅子が回転して部屋の主が向き直った。一馬は「衛生研究所・獣疫検査室の村瀬です。狂犬病発生状況の資料をお持ちしました」と頭を下げた。

「ほう、きみか。だいぶよくなつたようだね、顔の傷」

四十代前半であろう男は手にしていた分厚い書物を机の上に置いた。長めに揃えた栗色の髪が波打っている。その男の顔を一馬はまじまじと見た。

「さきほどロビーを通りかかったとき　ああ、このまえの　とおもいだしたんだ。それがまさかきみだったとはね」

なおも合点のいかない顔をしていると、男は立ち上がるとうちの下士官が迷惑をかけたね、と柔らかな物腰で右手を差し出した。そういえば、確かにあの夜マッチの灯りの中に浮かんだ顔だ。一馬は礼もそこそこに手を差し出した。

「ウィルス部長のアンスローです。かたい挨拶はぬきに。よく来てくれました」

中佐は満面の笑みを浮かべた。あたたかい手だった。くだけた口調で「ミスター・ムラセ、早速だがいくつか教えてほしい」といい、カップにコーヒーを入れ勧めてくれた。

一馬は、去年と今年の発生件数、そして発生場所を資料に目を落としながら夢中で説明していった。いちいちそれにうなずいていたアンスローは、やがて「そうだ、こうしようじゃないか。このやり方はどうだろう」と両切りのたばこをくわえ、一馬を抱きかかえるように壁際にあるボードの前に案内した。

そこには東京の地図が所狭しと貼ってあった。彼はその前に立ち、今年の最も新しい真正狂犬の発生場所と発病月日を訊いた。資料をめくってそれに答えると、発病月日を書き込んだ紙片を発生場所に虫ピンでとめていった。年ごとに違った色の虫ピンを使い、根気よくその作業を繰り返した。一日では終わらずしばらく通うことになった。門衛や受付とも顔見知りになり、ときには軽口をたたくようになっていた。

何日か作業をしていくうち、どの犬がどの犬に咬まれたかが浮かび上がってきた。つまり、どういう感染経路で広がっていったかを推測できる疫学地図が、しぜんと出来上がっていった。それは予想しなかったことだった。

地図が完成するという日の午後、いつものようにアンスローの部屋を訪ねると先客があった。髪をきれいに後ろになでつけ、ロイド眼鏡をちょこんと鼻にひっかけている。一見

して神経質そうな印象を与えた。中肉中背。年齢は中佐と同じか、いくらか下だろつか。「こちらはドクター・ムラセ。いまこれを手伝ってもらっているというより、わたしのパートナーだ。東京都の衛生研究所に勤めている」

アンスローはボードの地図を指して一馬を紹介した。

「こちらドクター・セイビン。ポリオの生ワクチン開発ではあまりにも有名な男だ」

一馬は当惑した。獣疫検査室では一番の下っ端にとつて「ドクター」の称号は過分だ。

しかもこの世界であまりにも有名な人物、あのアルバート・セイビンが目の前にいる。おすおすと手を出すと握手した。

「そういえばアルバート、きみはどこにいた？」

アンスローがコーヒーを渡しながら訊いた。

「そう、最後は沖縄かな」

「じゃあ、どつちみち出会わなかったんだ」

「何が？」

セイビンは首をかしげている。

「いや、ドクター・ムラセはカミカゼだったからね」

これには一馬が肝をつぶした。あわててアンスローに顔を向けると、片目をつぶって笑っている。

「もしきみがフィリピンあたりで船に乗っていて、終戦がもうちょっと遅れていたら、こつやつてコーヒーも飲んでいらなかったってことさ」

「そりゃ命拾いをしたな」

セイビンは首に手を当て苦笑した。一馬はどんな顔をすればいいのか途方に暮れた。

その後もたびたび丸の内にある四六部隊のアンスロー中佐を訪ねた。勤務先ではお目にかかれない文献を読ませてもらったり、研究論文を米国の雑誌に投稿することを手伝ってもらった。

季節はいつの間にか冬になっていた。

「で、仕事には慣れたのか？」

一馬は落ち葉をつま先ですくうように蹴飛ばしている。

「だいぶ」

前を歩いていた和恵が振り返った。

以前、研修生として衛生研究所に来た和恵は、いまは滝野川の助手をつとめている。彼

女が研究所を去る日、一馬は美樹の本名は伊藤美子だということを聞いた。和恵の腹違いの姉である。姉がどうやら所長に囲われているのも獣疫研究室で試験管を振るようになったから知ったらしい。どこか潔癖な和恵はすべてを白紙にと別の途を選択した。課長に辞める旨を伝えた。一馬はまた一番の下っ端に戻った。

「姉とは逢ってるの？」

「いや。連絡先を知らないし、電話もない」

「つまり、その……男と女の関係になったの？」しきりに握った手を組み替え、それにせわしなく目を落としている。

「なりかかったけど、やめた。好きになりかけた娘がいたから……」

和恵は、ふうん、といって空を見上げた。目もとにかすかに光るものがあった。細かい表情までは読み取れなかった。冬日は短い。あたりは薄暗くなりかけている。そんな気がしただけなのかもしれない。

「わたし、もう行くね。明日の学会のレポートがまだ残っているから。あ、そう。今度結婚することになったの、滝野川さんと」

背中を向けると彼女は足早に去っていった。その先には、ネオンに灼けほのかに輝く雲が低く垂れ込めていた。

コートから伸びたふくらはぎがやけに白く眼に残った。